

ハウズ通信

本郷文化フォーラムでは水曜（18時45分～）と土曜日（13時～）に講座を開講している。今号では6月に行なった講座のうち、3つの講座の通信を掲載する。【編集部】

6月1日(土) 労働組合で取り組む日朝連帯運動 群馬の森・追悼碑裁判を闘う

群馬県の県立公園[群馬の森]（高崎市）は、朝鮮人が強制連行されていた日本軍火薬製造所の跡地にある。敗戦まで、強制労働によって多くの朝鮮人がそこで命を落とした。その一面に犠牲になった朝鮮人たちの追悼碑を建立することは県議会の全会一致で決まり、県の設置許可が下りたのは二〇〇四年三月。同年四月には除幕式が行なわれ、翌五年から一二年まで毎年一回、碑の前で追悼式が行なわれてきた。加害の歴史を反省し忘れまいとする取り組みである。

ところが一二年、碑文を「反日的」だと在特会など右翼が騒ぎ出し、碑の撤去を求めて街宣活動を始めた。県議会はこのヘイトクライムに屈して、一四年六月、設置許可の取り消しを求める請願を賛成多数で採択してしまう。同年七月、県は設置期間更新を不許可とした。

碑を管理してきた『記憶・反省・そして友好』の追悼碑を守る会は当然ながら県を提訴、二〇一八年二月、前橋地裁における一審は県の「不許可処分を取り消す」という判決を下した。基本的には「守る会」の勝訴である。しかし判決は、碑の前で行なわれてきた追悼式で「強制連行」という発言があったことを「政治的発言」とする県の主張は認めるなど問題も残した。言論・表現の自由、政治活動の自由への侵害を容認してしまったし、植民地支配責任の自覚を欠く。裁判は現在、二審である東京高裁において和解協議が行なわれている。

六月一日のHOWS講座は、国労高崎地本の倉林誠書記長を講師に招き、「労働組合で取り組む日朝連帯活動」をテーマに、この裁判闘争の報告を受けた。講師は、民営化後のJRという厳しい環境の中で活動を展開してきた老練な組合オルグらしく、自らの豊富な運動経験を、ときに会場から笑いをとりながら語った。後半は、倉林書記長が最近自身が朝鮮民主主義人民共和国を訪問したときの模様をスライド写真を使って報告。偏見を持たずありのままの姿を見れば、いま日本で流布されている共和国のイメージがいかに歪められたものかがわかると力を込めた。

講座のあとの懇親会も和やかな雰囲気であった。【神田五郎】

6月12日(水) 朝鮮半島からみた日本の歴史【第2回】 今日の東アジア情勢を掴むための基本的視座

HOWSの連続講座、「朝鮮半島からみた日本の歴史」の第二回、「朝鮮と日本の住民の成り立ち、倭の王権と朝鮮（高句麗、百済、新羅、伽耶）」が開かれた。参加者は講師を含め四三名。講座の紹介文が『東京新聞』に載ったこともあってか、HOWSに初めて参加した人も多くいたようだ。いまこそ隣り合う日本と朝鮮の歴史を学ぶべきではないか、という参加者の熱意を感じた。

二〇〇〇年におよぶ朝鮮と日本の歴史を学習する本講座の講師は、朝鮮大学校朝鮮問題研究センター長の康成銀氏だ。事前に、本紙一〇四一（二〇一九年六月一日）号「付録」の開講講座のレジュメを読んで参加したが、本講座への期待は大きい。

今回は、世界史的視点での「民族の形成」の問題点、紀元前一一世紀ころから五世紀までの約一五〇〇年間の中国、朝鮮、日本（倭国）の「民族形成」の実態と三国間の歴史事象のそれぞれの認識の差を講義された。

「現在、世界にはおよそ二〇〇の国家と四千から五千の民族集団」があり、「民族の形成、国民国家の形成は多種多様」である。はじめに、「伝説、神話には国民国家の本質からして近現代の心情が投影」されており、「近代国民国家の成立が民族問題を顕在化させる。前近代は民族の雑居・複合的存在が常態であった」という、氏の民族問題の基本的認識が示さ

れた。そして「封建的な分割状態から資本主義的市場経済を経て形成したヨーロッパの民族と、長期的かつ強固な中央集権的権力構造のなかで、早い時期から形成されてきた東アジアの民族は、その始原、形成、発達過程が異なる。」「中国、朝鮮、日本は、前近代に形成されていた国家の枠組みを維持して近代国民国家を成立させたという点で、世界的に例外的な存在」と規定された。この認識は東アジアの歴史を学ぶ者にとって重要だと考える。

講義は以後中国、日本、朝鮮三国の関係史に進むが紙幅がないので残念ながら項目だけを記す。中国の場合、「中国民族の起源」「言語構造の違い」「中華民族国家」。日本の場合、「日本列島の住民の成り立ち」「弥生文化の朝鮮的性格」「倭の王権と朝鮮三国—『任那日本府』の問題」。朝鮮の場合「朝鮮民族形成に関する様々な見解」「紀元前後期、朝鮮半島と中国・東北地方の諸族」「五世紀以後の状態」「朝鮮の『帰化姓氏』」「女真族について」。

昨年一年間梅田正己さんの『日本ナショナリズムの歴史』を学び、これから一年間「朝鮮半島からみた日本の歴史」を学ぶ。この講座での学習が現在の東アジア情勢の認識を深めることは間違いない。【宮坂静生】

6月15日(土) 『泥ウソとテント村』(一東大・山形大廃寮反対闘争記一) 上映会に 35名参加 学園内に抵抗の主体を

「ナンセンス!」「よし!」の合いの手を久しぶりに聞いた。会場には二〇代から四〇代の参加者が目立ち、いつものHOWSとは会場の匂いも違った。

山形大学学寮、東大駒場寮、東北大日就寮、北大恵迪寮などの元寮生、日就寮・一橋大学中和寮の現役寮生も参加した。多くは上映活動など廃寮反対闘争の過程で出来たつながりで集まった。

約二〇年ぶりに顔を合わせたのだが、自己実現ではなく連帯を、受益者負担ではなく社会負担を、他人事ではなく当事者性を、弾圧への抵抗闘争の必要を口々に語った。そしてそれぞれが寮を出た後も何らかの社会運動にかかわっている。

このような個々人とそのつながりを作り出す場が、日本中の大学にあるとなれば、粛々と「大学再編」を進めるにも、人民搾取を強化するにも障害となる。なるほど資本家階級は潰したがるわけであると、改めて思わないわけにはいかなかった。

この映像(二〇〇一年に潰された山形大学学寮と東大駒場寮の廃寮反対闘争)の中でわれわれが反対していることは約二〇年を経た今では、残念ながら全国の大学において現実となっている。学内寮や自治寮は、ほとんどが潰され、産学協同は当たり前、立て看板さえ禁止され、大学全体の予算は縮小・競争的配分が一層強められている。そして教授会の自治どころか学生自治団体も形骸化あるいは消滅させられている。抵抗主体を失った学生は学費の値上げや奨学金の縮小を宣告されても、ただ受け入れてアルバイトに時間と労力を取られ、借金を重ねるばかりである。

この日は参加しなかったが京都大学の吉田寮は大学側から「明け渡し訴訟」を起こされている。日就寮では、例年、新入生に対して大学が中傷宣伝を繰り返した結果、現在寮生が九名まで減り消滅の危機にある。そして一橋大学では昨年五月に二つの寮の寮費を四、五倍に激増させることが決定事項として一方的に通告されていることなどが報告された。

われわれを取り巻く現状は厳しい。だからこそ課題は満ち満ちている。この日集まったような自覚ある部分が少数であっても協力関係を持って学習活動をし、その成果を共有する。そして具体的課題への対応を軸にして再び学園内に抵抗主体を作り出す可能性はあるし、そうでなければならない。

二〇年前の廃寮攻撃への反対闘争と敗北の経験は、今の闘いの教訓として未来に繋げねばならない。【藤原 晃・元駒場寮生】

(『思想運動』1042号 2019年7月1日号)